

林相珉著『戦後在日コリアン表象の反・系譜—〈高度経済成長〉神話と保証なき主体』

川口, 隆行
広島大学教育学研究科准教授

<https://doi.org/10.15017/25424>

出版情報：九大日文. 19, pp.141-144, 2012-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

林相珉著

『戦後在日コリアン表象の 反・系譜——〈高度経済成長〉 神話と保証なき主体——』

KAWAGUCHI
TAIJIYUKI
川口 隆行

1.

たしかに「在日文学」については、これまでも多くの研究・批評が積み重ねられてきた。だが、本書はこれまでのそうした営みとはいささか趣がちがう。「在日文学」という文学ジャンルの存在を自明とし、そこに何らかの新知見を加えようというのではない。国民国家論、カルチュラルスタディーズの知見も下敷きに、著者は「在日文学」を一九六〇年代後半に成立した歴史的制度と認識、それがつくりだす血統主義的な「在日らしさ」の形成を問い直そうとしている。

著者によれば、従来の日文学、日文化論は、日本／在日、加害／被害、差別／被差別といった二項対立を前提とし、在日コリアンを固定的な「主体」として位置づけようとしてきたという。だがこうした自己充足的な主体の捉え方は、「在日らし

さ」にうまくはまらないものを排除、忘却してしまう。著者は、「主体」を特定の状況や文脈との「折衝・交渉」によってそのつど形成されるものと捉え、主体化の権力作用こそを問題とし、主体化のプロセスにおいて排除されたものを「保証なき主体」と呼び、それは「主体化それ自体を阻むものとして葛藤していく主体」（八頁）とも説明される。

「在日らしさ」の形成とは、それと対置される「日本らしさ」の形成を意味している。著者は、近年のいわゆる昭和三〇年代ブームにおける在日コリアンをめぐる文化的話題の欠落に覚えたと違和感にふれ、戦後日本のナショナル・アイデンティティの「起源」を〈高度経済成長〉のはじまりの時期である昭和三〇年代にみようとす。そこに確かに存在したはずの多様な差異を忘却しつつ、「日本らしさ」を保証する「起源」は想起されるという仕組みであろうが、筆者はそれを現代の問題にとどめず、「戦後日本の在日コリアンをめぐる語りの枠組みそれ自体を再考する一端として受けとめるべき」と主張する（四頁）。「在日コリアンに関する語りが、いつしか戦後日本の〈高度経済成長〉に関する語りへと同化してしまうような現象は、現在においてのみ見られるのではなく、昭和三〇年代以降、幅広い領域で確認できる」（同頁）というのである。後年の「在日文学」のジャンル化（＝可視化）も、戦後日本の「国民文学」に関する語りに包摂された、同化現象のひとつとされるのである。

著者の述べる主体観自体は、ポストモダニズムの潮流以降、研究・批評言説としては珍しいわけではないが、著者は①日本

人による在日表象、②在日コリアンによる自己表象、③在日表象における日本人と在日コリアンとの相互遂行性、という三つの次元を設定して、三者の交差のうちに、「高度経済成長」あるいは戦後日本における在日コリアン表象の生成を動的に描きだそうとするのである。

本書のもくろみは、在日コリアンをめぐる〈反・系譜〉というもう一つの〈系譜〉を記述することではなく、ナショナル・アイデンティティや民族的アイデンティティなどの硬直した枠組みから排除されもれ落ちる要素から、戦後日本における在日コリアン表象の構造と力学、そして分節される主体であるがゆえの様々な可能性を模索することにある。それは在日コリアンを固定的なアイデンティティをもつ主体としてではなく、流動的で可変的な主体として記述する可能性を考えることでもある。(二四頁)

2.

もうすこし、本書の議論を再構成しながら内容を紹介しよう。構成は、第一部「高度経済成長期の物語——「起源」としての昭和三〇年代」、第二部「(特権的)肉体論——在日スター研究」に大きく分かれている。

第一部前半では、『にあんちゃん』(第一章)、『キューポラのある街』(第二章)といった三〇年代に発表され、改版や映画化を繰り返しベストセラーとなった作品を取り上げる。前者は出

版社の戦略と読書感想文という教育装置、後者は北朝鮮帰国事業と当時の経済政策の変化、といった同時代の文脈に接続される。大きく共通するのは、日本のナショナル・アイデンティティ形成の過程で、「起源」に存在したはずの多様な差異が隠蔽、忘却され、作品が消費される過程を記述しようとする点である。第一部後半では、金石範『祭司なき祭り』(第三章)、梁石日『夜を賭けて』(第四章)をとりあげて、在日コリアン作家が後の時代から「起源」としての昭和三〇年代をどのように表象したかについて考察している。小松川事件を小説に召還した金石範は、差別／被差別の図式に依拠しない新しい主体性の構築を試み、またその困難さに直面したという。アパッチ族事件、北朝鮮帰国事業の問題を作品に挿入した梁石日は、加害／被害の図式にそつた記憶の召喚をしているようにみえるが、やはり作品に挿入された一九九三年の「ワン・コリア・フェスティバル」の場面に注目することで、実は被害者という立場から発話するジレンマを描いたのではないかと喝破する。

第二部は、狭義の文学研究に収まらない文化研究の実践。考察の中心を文学や映画から戦後日本の表舞台で演じる／演じられた在日スターに移し、大文字の「日本人」との交渉のなかで構築される「在日らしさ」の生成をよりダイナミックに把握しようとする。差別／被差別という二項対立を軽やかに超えようとする李礼仙の姿(第五章)、「本名を呼び名のる運動」のなかで理想化される張本勲が「口籠る」アイドルであったことの意味(第六章)、「国民的」演歌歌手を演じ続けた都はるみと中上

健次の相互交渉の様子（第七章）、そして、『あしたのジョー』における矢吹丈と韓国金竜飛の対戦を、第2次朝鮮戦争の危機説と日韓の経済接近という文脈から解説（終章）といったように、議論のスリリングさは当然として論じる対象にもハナがあり、終始ワクワクしながら読了したことを告白しておこう。

3.

もちろん作品や表象の細かな意味づけ、論述の展開にまったく異論がないというわけではない。ここでそのひとつひとつを指摘はしないが、とくに作品（テキスト）を分析する際にもちだされ、接続される同時代の文脈（コンテキスト）の扱い方に、性急さ、未熟さを感じさせる箇所があったかと思う。だがそれは本書の美德でもある、縦横無尽に論じる対象を移動させながら在日コリアン表象の生成の力学に様々な視点から迫ろうとする姿勢ゆえのものともいえよう。だから、結論からいえば、先に触れた著者のもくろみの過半は成功し新たな研究領域を切り開く可能性を十分に備えているといっても過言ではない。ちなみにこの小文を書くにあたって、すでに出された書評がないかひとつと探してみたが、管見の限りでは見当たらなかった。たんに調査不足なだけかもしれないが、それにしてももつと言及されてしかるべき著書と思う。今後、在日コリアン表象のみならず戦後日本文学、文化史研究に関心を寄せる人々に広く読まれるべき書物のひとつであることは間違いなく、さらには韓国語版に翻訳される道筋も検討すべきかと個人的には強く思う。

そのうえで指摘しておくべきこととすれば、まず、副題にもある「高度経済成長」神話」という言葉に関してであろうか。一般に、日本における高度経済成長期とは、一九五四年から一九七三年の年一〇%以上の経済成長を続けた約二〇年を意味するらしい。その後一九九〇年代初頭のバブル崩壊まで安定成長をつづける（この時期も広義の高度経済成長期ととらえる議論もあるようだ）。本書は経済学で議論される厳密な高度経済成長期の内実というよりも、そこに「起源」を有して現在まで緩やかに反復される「高度経済成長」神話」を問題にしようとしている。経済成長をささえる「ひたむきさ」「明るさ」あるいは「労働の大切さ」などといった神話（物語化された価値観）が、「保証なき主体」としての在日コリアン（あるいは日本人）を語るのを難しくしたということであろう。

ただし、多様な角度から「保証なき主体」の生成を記述しようとする試みに対して、「高度経済成長」神話」自体についての考察はやや手薄になつてはいないだろうか。たとえば、「高度経済成長」神話」の（起源）としての一九五〇年代後半と、日韓基本条約締結からベトナム戦争激化、沖縄「返還」、日中国交正常化（日台断交）といった東アジア世界の再編が進む六〇年代後半から七〇年代前半——それは一般にいう高度経済成長期の終焉の時期にあたる——とでは、「神話」の特性や機能、機構にも微妙かつ決定的な差異があるように思うのだが、どうだろう。そもそも「神話」とは、差異を含みながら反復されることで「神話」たり得ているはずだ。

さらに飛躍を承知でいえば、六〇年代後半から七〇年代前半とは、日本の高度経済成長がひとまず落ち着く時期であるとともに、韓国が高度経済成長を開始する時期でもあろう。やはり同時期に台湾、香港、シンガポールが成長期をむかえ、その後中国さらには東南アジア諸国とつづく。こうした東アジアあるいはアジアの高度経済成長はどのような「神話」を各地で生み出し、それらが交錯してきたのか。そこまで一気に話を膨らませるのは時間的にも物理的にも到底無理だとしても、日韓、日朝関係も意識しながら戦後在日コリアン表象を捉えようとした本書ならば、韓国の高度経済成長（「高度経済成長 神話」）にも目配りした議論があつてもよい気がした（本書にそうした視点がないうわけではない。『あしたのジョー』を論じた終章にその片鱗が強く見られるが、だがそれも日本の高度経済成長の側からの議論にとどまっている）。

率直に言つて、著者の問題関心は、まず「保証なき主体」にあつて、その生成のメカニズムを言語化するためにいささか便宜的にもちだされたのが「高度経済成長 神話」ではなからうか。それが、「高度経済成長 神話」を平板化してしまつた理由かもしれない。しかしながら、「高度経済成長 神話」を神話化することなく、その生成、変容を複雑な相の下に捉え直すことも必要な作業かと思う。

おそらくそうした作業は、在日コリアン表象を考えるうえで

も大切なことになるはずだ。単純に言つて、昭和三〇年代の在日コリアン表象の脱政治化と昭和四〇年前後の「在日文学」の領域化では、似て非なるものも多いだろう。そうした両者の差異を記述するためには、あるいは、著者自身が「あとがき」で記している文学史に登場するような「直球」作品ではなく、「変化球」を投げてみたという姿勢も、問い直しが求められるかもしれない。「変化球」のなかに大文字の「日本人」との交渉のなかで生成される「在日らしさ」の問題を見ようというもの、たしかにひとつの戦略である。同時に「在日文学」と自らを括り、それを引き受けていった著名な作家や作品の内側にも「保証なき主体」を見いだすような作業も重要ではなからうか。そうでないと、著者自身が「変化球」／「直球」という二項対立的図式を強化してしまうかもしれない。作業仮説としてもちだしたはずの大文字の「日本人」を固定化、実体化してしまう恐れだつてないとはいえない。「変化球」を捨てて「直球」を投げよ、というのではない。場合によつて、変幻自在に投げかけたらどうだろう。著者がそうしたピッチャーになれる実力の持ち主であることは、本書の議論がすでに証明しているのだから。

（花書院 二〇一一年三月二五日 二七〇頁 二八〇〇頁）

（広島大学教育学研究科准教授）